

異文化圏実習実施報告

－ 2010 年度オーストラリア －

三浦 登志一, 村山 良之, 大野 真菜美, 澁谷 貴子
鈴木 雅寿, 中川 裕幸, 渡邊 智
(山形大学大学院教育実践研究科)

日本とは異なる文化をもつ国の学校の在り方や授業の方法等について、参加体験型実習を通して実感を伴った理解を図るため、オーストラリア（キャンベラ、ワガワガ、シドニー）において教育実習を行った。山形についてのプレゼンテーション、折り紙、習字、寿司づくりなど、日本の文化を小学校から高校までの子どもたちを対象に授業実習として行い、その結果、教育実践のもつ普遍性とそれぞれの地域の実情に応じた特殊性について理解を深める機会となった。

[キーワード] 異文化理解, 教育実習, 参加体験型実習

1 異文化圏実習のねらい

(1) 「実践」の幅の拡大

本研究科では、「理論と実践の融合」を理念として掲げ、2年間で10週にわたる教職専門実習を課している。この10週間の教育実習は、県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において行われ、教育に関する実践的な経験を積む重要な場となっている。教職専門実習で経験するのは、日本の国内でこれまで継続的に行われてきている教育活動であり、対象となる児童生徒のほとんどは日本の文化の中で育ってきた子どもたちである。教育の在り方を考えるベースは、基本的にはこのような日本における教育実践である。

異文化圏実習では、教育の在り方を考える上で、より幅広い視野をもつことを可能とするため、実践の場を海外に求めている。オーストラリアの学校で行われている教育活動を観察するだけでなく、そこに自分たちも参加して授業実習を行うことで、教育についての具体的事例を蓄積することを目指している。学校の在り方について考える際には、日本のこれまでの実践、現在行われている実践に加えて、諸外国の教育活動の良さをどのように取り入れていくのかを考えることも必要である。

オーストラリアは多文化共生社会という特徴をもっている。首都キャンベラがあるニュー・サウス・ウェールズ州の学生の約4分の1は、英語を母国語としていないにもかかわらず、OECDが行った生徒の学習到達度調査（いわゆるPISA調査）で

は、読解リテラシーにおいて高いレベルの成果を挙げている。その背景には、英語教育や特別支援教育について特別のプログラムを組むなど、今後私たちの参考にすべき支援策が講じられていることがある。こうした地域の教育の実情を通して、教育についての実践的な感覚を高めることを目指している。

(2) 異文化圏実習の目標

異文化圏実習は、「学校と地域の連携、学校の在り方、そして授業の方法等のオーストラリアの各学校の現状に関して、参加体験型実習を通して実感を伴った理解を図るとともに、日本との相違点を明確にすることで、日本の学校教育及び教員の資質能力の特質と課題について改めて考察する」ことを目標としている。この実習は、「参加体験型」という特徴をもっている。異文化圏においてどのような授業が行われているかを観察するだけでなく、実際に授業を行うことになる。実感を伴った理解を促すことができるものになっている。

また、所属するコースに応じて、比較考察する資質や能力を設定している。「学習開発コース」は、多様な児童生徒とのコミュニケーション、授業形態や授業方法等であり、「学校力開発コース」は、教員の自立と使命感、学校と地域の連携等である。

2 オーストラリア及び実習地域の概観

オーストラリアは、日本のほぼ真南に位置し、オーストラリア大陸と周辺の島々からなる。大陸

表 1：異文化圏実習の日程

9/3	キャンベラ	金	研修 <input type="checkbox"/> 国会議事堂（新旧）	オーストラリアの歴史・政治
9/4	キャンベラ	土	参観 <input type="checkbox"/> キャンベラ補習授業校 講義 <input type="checkbox"/> オーストラリア（ANU 池田教授） 研修 <input type="checkbox"/> 学生（ANU）歌舞伎鑑賞	日本語教育の現状の観察 オーストラリアの教育事情 ANU の学生との情報交換
9/5	キャンベラ	日	研修 <input type="checkbox"/> 戦争記念館	日本・オーストラリア関係の理解
9/6	ワガワガ	月	行事 <input type="checkbox"/> 市レセプション 講義 <input type="checkbox"/> 地域の文化と教育（CSU）	実習地域についての理解
9/7	ワガワガ	火	実習 <input type="checkbox"/> ロック・セントラル・スクール	授業 児童・教員・地域との交流
9/8	ワガワガ	水	実習 <input type="checkbox"/> ワガワガ・ハイ・スクール	授業 授業参観
9/9	ワガワガ	木	実習 <input type="checkbox"/> ワガワガ・ハイ・スクール	授業 授業参観
9/10	ワガワガ シドニー	金	実習 <input type="checkbox"/> ワガワガ・パブリック・スクール 研修 <input type="checkbox"/> 選択研修	授業参観
9/11	シドニー	土	研修 <input type="checkbox"/> 選択研修	

の内陸部は広大な乾燥地域で、大陸北部は熱帯、東と南の沿岸部は温帯の気候である。主要都市のシドニーとメルボルンは、それぞれ大陸の東と南東の海岸部に位置し、旧宗主国等との交易拠点として発展した、もともと典型的な新開地の都市としての性格を有する。両都市の間、大陸東部を南北に走るグレートディバイディング山脈のなかに首都キャンベラは作られた。同市はオーストラリアの政治の中心都市であるが、同国経済の中心地はシドニーである。実習では、その両都市を訪れて日本との関係を含む現代政治史を学び、多民族・多文化共生について体感した。

ニューサウスウェルズ州ワガワガは、シドニーとメルボルンからともに 500km 弱とほぼ中間にあり、首都の候補地にもなったとされる。グレートディバイディング山脈の西側（内陸側）の緩斜面ないし平原、オーストラリア最大の河川マーレー川流域リベリーナ地方に位置する。2010 年は雨が多く、9 月の実習中に何度も雨に見舞われ、小規模な氾濫をいたるところで見た。農業地域の当地では、雨はおおいに歓迎されるべきものとのことである。同市の人口は 5 万人弱と小さいが、広大で豊かな農業地域の中心都市として、また軍施設のある都市として、中心部には大型ショッピングモールや宝石店等を含むかなり立派な商店街が成立している。当地は、もともとウィランジュリの人びとが住んでいたが、1829 年チャールズ・スタートの探検以降、多くの入植者が来て急速に発展したとされる。実習でお世話になったチャー

ズ・スタート大学は彼の名に由来する。（同大学は、旧師範学校、農業学校等を統合発展させてできた州立の大学で、その成り立ちや州または地域での位置づけは山形大学に似ている部分がある。）ワガワガからさらに 30km ほど南西にあるロックは、当地域の典型的な農村部の特徴を有し、ほぼ白人のみの社会とされる。実習では日本文化の紹介を強く求められた。

3 実習の計画と実際

(1) 実習の計画

異文化圏実習の日程は、表 1 の通りである。

キャンベラにおいては、オーストラリアの歴史や教育事情についての概要を把握することを主眼としている。多文化共生社会がどのような歴史の上に建設されているかについて理解することが、この後の教育実習にも生かされることになる。また、日本とオーストラリアがこれまでどのような関わりをもっているかについても知ることができるようにした。

また、オーストラリアの教育事情についての理解を深めるため、キャンベラのオーストラリア国立大学（ANU）、ワガワガのチャールズ・スタート大学（CSU）において講義を設定した。

(2) 事前指導の概要

4 月は本実習の授業選択のための説明会を実施した。実習準備を含む事前学習会を 8 月上旬と下旬に、2 日間実施した。そこでは、オーストラリアおよび訪問地の自然（地形や気候）と社会（歴

史や政治等)に関する講義と、現地での実習(授業)の準備を行った。現地校からの要望をふまえて、授業プログラムを設計し、教材を準備し、それを英語化した。日本から持ち込むべき物の準備等、事前学習会以外にも多くの時間を割いた。

(3) 授業実習の実際

今回の異文化圏実習で行った、教育実習の概要は以下のとおりである。

①キャンベラ補習授業校

「キャンベラ補習授業校」は、キャンベラ在住の日本人児童生徒(小学1年生から中学3年生まで)を対象にした学校である。キャンベラのディーキン・ハイスクールの校舎で、土曜日に国語と算数・数学の授業を行っている。教育実習としては、小学1年生の国語の授業を、2名の院生によるチーム・ティーチングで行った。

[授業者の感想]

- ・普段行っている国語の授業をイメージしながら補習校で授業を行ったが、週に一度だけ行われる授業であるため、授業への考え方に大きな隔たりがあった。補習校では、限られた時間の中でいかに学習の成果を上げるかということを大切にしており、学校での授業というよりも塾での指導に近い感じも受けた。



写真1:「大きなかぶ」の授業風景

②ロック・セントラル・スクール

ロック・セントラル・スクールは、ワガワガ市内から車で30分ほどのところに位置している。日本の小学生から中学生までが一つの学校で教育を受けている。今回の異文化圏実習では、5年生から8年生の児童生徒を3つのグループに分けた。「寿司づくり」「折り紙」「習字」の3つの授業を

並行して行い、1単位時間ごとにローテーションする方法を採った。また、全員を対象として山形を紹介するプレゼンテーションを行った。

[授業者の感想]

- ・ヘルシー志向が広まり、和食への関心が高まっているためか、必要な食材のほとんどをワガワガのスーパーで購入できた。値段は、日本国内に比べてやや割高であった。すし酢もそのまま使える物が購入できたため、味付けに関して苦労することはなかった。電子レンジでご飯を炊いたのは初めてであった。十分に米を水に浸した後、耐熱容器を使い加熱18分、蒸らし10分で驚くほどおいしくご飯が炊けた。今後、オーストラリアのどこかの学校で、すし作り体験をする上では、調理器具などのハード面が整っていることはもちろんであるが、どのくらいのスタッフがアシスタントとして参加できるかということも重要な要素となると考える。巻き寿司作りとはいえ、仮にも刃物等の危険物を用いた実技を伴う活動であり、安全面や、ふざけから生じるトラブルへの配慮が不可欠だからである。今回このコースに協力してくれた現地校の先生は常時3名(時に4名)であった。調理実習的な活動をさせることも今回が初めてであり、ましてや、相手は外国人の生徒であったため、安全面や態度面への配慮は皆無であった。そのような中、現地校の先生が、初めにこの活動への参加態度や心構えについて厳しく注意してくれたことは大変ありがたく、生徒の安全や授業での生徒指導という大事なことに気づかせてくれた。また、活動と並行して行っていた次のグループのための炊飯や食材準備にも、手分けをして、協力してくれたことも大きかった。活動形態も重要である。今回はYear5(小学校5年生相当)~Year8(中学校2年生相当)が入り混じったグループが編成されていた。更に、その中で、異年齢グループを構成したことにより、適度な緊張感と、教え合いの雰囲気形成されていた。このことも、和やかな雰囲気でも活動を進めることができた一つの要因と考えられる。
- ・ロック・セントラル・スクールでは、異学年による3グループをローテーションさせるため、同じ内容の授業を3回行った。「かぶと」を折るための日本の新聞紙を渡したところ、子ども

たちは書かれている文字に興味をもって新聞紙を見ていた。「かぶと」は簡単に折ることができ、自分が折った「かぶと」をかぶりながら、子どもたちは「ごみ箱」作りに取り組んでいた。しかし、「かぶと」と違って、内側を開いてつぶすように折るところが難しく、思ったよりも時間がかかってしまった。

- ・3回授業を行ったが、どのクラスもやりづらさを感じることはなかった。子どもたちはきっと普段行っている授業とは異なり、真新しさから緊張感をもって取り組んでいたためと思われる。しかしながら、取り組む意欲がクラスによって差があることを感じたことはあった。自分は普段から学級集団を意識して授業を行っているため、集団で子どもを見る癖が自然とついているように思う。それに、どのクラスも20人前後であったため、一人一人の学習の状況がはっきりと把握できた。これまでは、どうしても遅れがちな子を見逃してしまうことがあったが、今回の実習では、チーム・ティーチングということもあり、困っている子の様子やもっとやりたがっている様子がよく伝わってきた。個人の学習状況を把握する上で、少人数は欠かせないことのように思う。ただし、英語で会話ができれば、もっと子どもたちの反応を楽しむことができたのではないかと思う。いろんな漢字を紙に書いて、私にその出来映えを自慢しながら持ってきた少年など、反応が明らかな子は対応できたが、表情だけでは読み取れない子どもの本音を、言葉でやり取りすることができなかった。そんなもどかしさを感じながら、言葉の大切さを改めて実感した授業であった。
- ・プレゼンテーションを行う際に、オーラル・イントロダクションというアプローチを用いた。これは、学んでいる外国語を使って新教材を導入する方法の一つである。今回は、英語を使って「山形」という新教材を紹介した。彼らにとっての母国語である英語を用いたという点で多少違いがあるが、生徒とのやりとりを通じて、学習者の理解度やつまずきを感じながら新しい教材を導入する、あるいは授業を進めていくという手法が有効であることを実感した。
- ・予想したとおり、山形についての予備知識はほとんどなかったようであった。しかし、スライドの構成は分かりやすかったようで、どのクラ

スの生徒も大変熱心に聞いていた。説明の途中に発せられる問いかけに対する反応も大変よかった。また、このプレゼンテーションの後に設定した質問タイムでも、たくさんの質問が出された。特にロック・セントラル・スクールでは、時間が足りないくらいであった。蔵王についての説明を聞いて、小学生が火山の専門的な分野に関する質問をしたことには、大変驚き、また知的好奇心の旺盛さに感心した。

- ・視聴覚教材の有用性を実感した。「百聞は一見にしかず」のことわざが示す通り、ワガワガの生徒たちは、写真や地図を見ることによって、まだ見ぬ土地・山形のイメージをもつことができたと思う。そのことは、説明を聞く表情やその後に出された質問から感じられた。オーストラリアの生徒たちの自然な反応や、自発的に質問をする姿勢は、今後日本の生徒たちにも身に付けさせるべきものと感じた。この実習をコーディネートしたCSUのブライアン氏が、「質問することは、相手の言いたいことを自分の中で理解したことの証拠だ」と言っていた。まさにそのとおりだと感じ、また更に、質問をすることは相手への興味関心を示すことでもあると感じた。



写真2:「寿司づくり」の授業風景

③ワガワガ・ハイ・スクール

ワガワガ市の中心部にあるハイスクールであり、日本語の授業もカリキュラムの一部に取り入れられている。日本語学習を選択している生徒を対象として、「折り紙・習字」「プレゼンテーション」の2つの授業を行った。

〔授業者の感想〕

- ・ニュー・サウス・ウェールズ州の学校では、プロジェクタやスマートボードなどの ICT 機器がほとんどの教室に整備されていた。今回は、前面に提示した拡大コピーを指し示したり、ホワイトボード上で実際に折りながら折り方を説明したりしたが、教室にある ICT 機器を活用し、

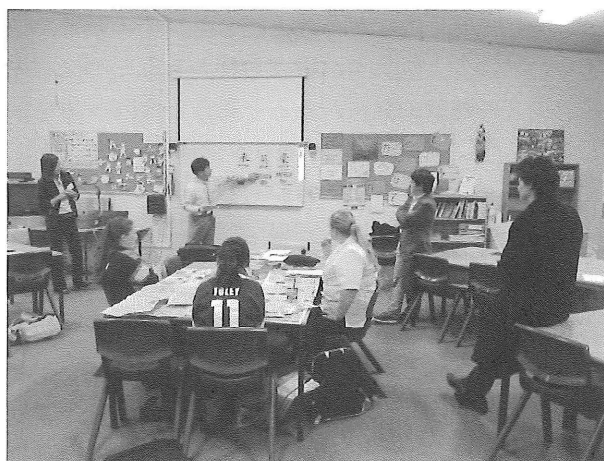


写真3：「習字」の授業風景

手元を大きく拡大して映したり、PowerPoint や動画で折り方を説明したりすることも方法として考えられる。

- ・プレゼンテーションをする中で、特に日本語で説明をした部分は、生徒の理解の様子や反応を見ながらゆっくりと、簡潔で易しい日本語で話すように意識することができた。一方で、日本語で説明する際に、よりネイティブの日本語に触れてもらうためにはナチュラルスピードで話し、必要に応じてスピードを落とすということもできたのではないかと考える。ALT との TT では多くの場合、ALT はナチュラルスピードで話す。生徒にとって早すぎると感じることも多いが、反応を見ながらスピードを落としたり、言い換えたり、繰り返したりして理解を促している。ワガワガ・ハイ・スクールの生徒たちがこれから来日を控えているという点からも、ナチュラルスピードでの発話について考慮しても良かったのではないかと考える。この経験から、授業での英語使用の際の発話スピードについても考えてみたい。必要に応じて英語での説明もしたが、途中少し長くなってしまったように感じられる部分もあった。インタラクティブなやりとりがもう少しあっても良かったので

はないかと思う。もっと生徒を巻き込む発問の内容やタイミングの工夫を考えていきたい。関連して、ワガワガ・ハイ・スクールやオーストラリアの学校の様子が事前に分かっていたら、比較するなどインタラクティブな側面を増やすことがもう少し可能になったと考えられることから、情報収集が不十分であったということが反省点として挙げられる。

- ・プレゼンテーションの資料については、グラフや時間割の文字が小さくて見づらかったことが反省点である。また、スライド操作はもっとすっきりさせることができたし、事前の打ち合わせを十分に行っておけば、よりスムーズにいったのではないかと感じた。今後のプレゼンテーション資料を作る際に工夫していきたい。内容については、「高校生活」ということで授業・部活動・学校行事の3点を中心としたが、高校生の趣味や余暇の過ごし方、人気のあるアーティストやファッションの紹介なども興味関心をもってもらえる分野だったかもしれないと思った。

4 考察

参加した院生の異文化圏実習についての考察をいくつかの観点に分けて示す。最初に挙げるのは、オーストラリアに限らず、どのような文化であっても共通するであろうと思われることである。

- (1) この実習を通じて、なれない土地での授業はとまどいも多く、急な変更も余儀なくされる場面もあったが、ここで臨機応変に対応できる力が教師には必要であると思う。「子どもたちの前に立ったら…」と、実習中に何度も現職院生からお話を聞いたが、まさに子どもたちの前に立てば、不安など見せずに授業に臨まなければならない。実習中、他の実習生が堂々と一生懸命に授業に臨む姿は、子どもたちに何か伝わっているのではないかと感じた。子どもたちとともに授業を作っていくことのできる教師という職業に魅力を感じることができた。また、小学校における外国語活動では、外国の文化を直接学ぶことにより、意欲的に学習に参加できるのではないかと考えた。EATやELTを活用し、文化の学習を交えながら学んでいける授業を設定してみたいと考えた。

(2) 新しい学習指導要領で高学年に外国語活動が導入されたとはいえ、その指導に専門的な技能や知識が必要ではなく、教員として差し迫った喫緊の課題を追究するためにこの異文化圏実習に参加したというわけではない。とはいえ、今回参加して得たものは大きかった。子どもの実態が分からず、細部における教師の指導も見えないまま、手探りの状態で授業を構成したこと、会話が成り立たず、冷や汗をかいて手助けをしてもらいながら授業を展開したこと、そのような大変な思いをしながらも、やはり子どもが一生懸命取り組んでいる姿、無邪気に話しかけたり笑いかけたりする姿、会話が成り立たなくても何とか相手を理解しようと試みてくれる姿は、どの国でも子どものもっているすばらしさだと思うし、そのような姿にたくさん接することができる教員の良さを改めて実感することができた。

次に、「日本語学習」の観点から、異文化圏実習を振り返ってみる。実習プログラムの特徴の一つに、オーストラリアの生徒が日本語を学習する様子を参観するということがある。外国において日本語学習がどのように行われているのかを実際に見る機会は少ない。英語が使われている社会の中での日本語教育を通して、日本での英語教育の在り方を探る視点とすることができる。今回の参加者のうち2名は、中学校・高等学校で英語を教える教員であり、次のように考察している。

(3) ワガワガ・ハイ・スクールの生徒は、日本語を外国語として学んでいる。それは、ちょうど、日本における英語と同じ状況にある。Year11の生徒の日本語の習得状況を見て、自分の周りで普段使われていない言語を習得することは思いのほか難しいのだということを感じた。日本人は沈黙をよしとする文化をもつため、言語習得が遅いのかと思っていたが、一概にそれだけでも言い難いと思った。あれだけ積極的に質問をしたりする習慣をもつオーストラリアの生徒が、4年学んでも片言しか話せていない様子を見ると、いかに生徒の発話への意志を喚起するかということ、あるいは、習った外国語を状況に合わせて選択し、考えながら使う機会をいかにして与えるかということがかなり重要なのだということを確認した。

(4) オーストラリアでの日本語習得については、

キャンベラでさえも「外国語」としての側面が強いことが補習授業校での先生方との懇談で分かった。これは、日本（山形）で英語教育をすることに似ていると感じた。どちらの場合も習得の必要性を感じにくい、日常生活において実際の言語活用場面が多くないということが言える。しかし、そんな中で、特にワガワガ・ハイ・スクールの生徒たちの日本語の理解度は決して低くはなかったと感じた。その効果の一つには少人数教育が挙げられ、もう一つには先生方の熱意の強さがあると思う。今回授業を参観した二人の先生は、私たちが参観したことにより一層強くなったのかもしれないが、日本が好きで、その気持ちが授業に現れているように感じた。実際に仕事をしていると授業以外にも様々な仕事があるし、どうしても授業に向かうモチベーションが上がらないこともあった。しかし、先生の気持ちや熱意は生徒に伝染することによってこれまで以上に念頭に置いた授業をしたいと思います。

また、実習期間中のオーストラリアでの実践的なコミュニケーション、ワガワガ・パブリック・スクールでの授業参観を通して、英語教育の在り方について考えている。

(5) 今回の実習では、オーストラリアなまりに苦勞させられた。この経験は、これまでの実践とこれからの実践について考えるよいきっかけとなったと感じている。これまでの実践では、特別な場合（生徒の英語スピーチコンテスト参加など）を除き、生徒にはそれほど発音の矯正を求めてこなかったし、オーストラリア英語、イギリス英語、アメリカ英語ばかりでなく、その他英語が話されているそれぞれの国や地方の英語になまりがあるように、日本語なまりの英語があってもやむを得ず、上手に話すよりも間違いを恐れずたくさん発話させる方に生徒の気持ちを向ける指導に取り組んできた。しかし、オーストラリアなまりが少ない英語は聞き取りやすく、質問や会話のしやすさを感じた。つまりそのとき、コミュニケーションにストレスを感じることなく、話を聞いたり話したりできたということである。相手の言うことが聞き取れなければ聞き手にとってのストレスになるし、何度も聞き返されれば話し手にとってのストレスになる。そういう状況を少しでも減ら

すために、より正確な英語の発音・強勢、発話上の特徴（音の同化や脱落、つながりなど）を生徒に身に付けさせる手立てを考えてみたい。また、英語の発音や発話上の特徴を意識して言えるようになることは、まとまった英文を聞き、理解する力に結び付けられるのではないかと考える。

(6) ワガワガ・パブリック・スクールで見せていただいた Reading Discovery の授業では、フォニックスが英語学習や習得の手助けになることを改めて感じた。フォニックスは以前取り組んでみたことはあるが、中学校で既習であってもその取り組みや習得にバラつきがあることや、1（教師）対多（生徒）でなかなか効果が感じられる指導ができず、最近はあまり時間をかけて触れなくなっていた。クラスサイズについては日本とオーストラリアでは大きな違いがあるが、限られた状況で効果を上げるために、フォニックスを含め、何ができるのかについて考えたい。さらに、英語科の教員間で共通理解が必要なのはどのようなことなのか、生徒が何を求めているのかなどについても今後も考えていきたい。

訪問したオーストラリアの3校に共通する特徴として少人数による教育がある。授業参観、授業実習の両方を通して、その有効性を挙げている院生が多かった。その中で、「学級の人数と授業スタイル」の関連から日本の授業を見直した院生も見られた。

(7) オーストラリアは1学級当たり 20 人前後の児童生徒数である。私が見た限りでは、ワガワガ・ハイ・スクールとワガワガ・パブリック・スクールの両方で、教師の話す時間が長かったように思う。話す内容については詳しくは分からなかったが、教師が知識を与え、そこから子どもたちが考えていくというような授業スタイルに感じた。また、子ども一人一人が独立して学んでいくような印象である。日本のように、集団で高め合っていくという雰囲気はあまり感じられなかった。更に、学習規律について厳しい姿勢で臨んでいるようであった。幾度となく集中すること、話をよく聞くこと、よけいな私語は言わないことなどが教師から子どもたちに伝えられていた。このように見ていくと、オーストラリアの学校では、個々の学習に対す

る保証が手厚く、個人の能力を引き出すことを主眼にしているように感じられる。教師と子どもの双方向的な学習を通して、知識を授け、それに反応することを重要視しているように思う。しかしながら、教師と子どもの結び付きは強いものの、子ども同士をつなぐ学習は見られなかった。多様な考えを、話し合いを通して感じ合うという授業を見ることはなかった。たまたまそのような授業を見なかっただけなのかもしれないが、多様性が国の土壤にすでに存在しているため、敢えて授業で行う必要性をもっていないのかもしれない。いずれにしても、クラスの人数と授業スタイルは日本とは異なっており、優劣ということではなく、その歴史や社会性、国民性などを背景としながら、より大きな学習効果を得られる手段を採っているということであると思われる。20 人前後の少人数学級の良さをオーストラリアの学校で見出しつつも（個々の学習状況を把握しやすいなど）、それにより価値観の多様性を往還する場が失われる可能性があることも、しっかりと考えなくてはならないと感じた。

今回のプログラムに含まれてはなかったものの、多文化共生社会であるオーストラリアでは、個に応じた教育の在り方についても学ぶべき点がある。「特別支援教育」に対する関心の高い院生は、ワガワガ・パブリック・スクールでの聞き取りを中心に次のように考察している。

(8) オーストラリアの特別支援教育の現状として、障害児（主に発達障害児）の多くが通常の学級に在籍していると言われている。学級は 20 人から 25 人と日本と比較して人数は少ないものの、担任だけで指導するのは難しい。そのため、Teacher's aide (assistant) を配属し、チーム・ティーチングの形態をとることもある。また Peer Teaching や Group Work などを取り入れ、子ども同士が互いに教え合う活動を行うこともある。Special Education School (特別支援学校) への進学は、IQ55 以下の児童生徒が対象となり、保護者とカウンセラーの意見を受け、州が決定する。今回滞在したワガワガには4つの学校があり、1つは Special Education School として様々な障害のある児童生徒が通う。他の学校には、それぞれ Special Education Class があり、本実習で訪れたワガワガ・ハイ・

スクールは、その中でもよりサポート体制の整った学校である。学校にはスクールカウンセラーが配属されている。1人のカウンセラーが受け持つ児童生徒は750人から800人と言われている。ワガワガ・ハイ・スクールにおけるカウンセラーの主な仕事は、卒業後の進路相談である。進路は、本人と保護者の意向と本人の適性に合わせて決定される。障害のある子どもの進路として、職業専門学校（TAFE）で自立に向けた職業訓練を受け、就職をすることが多い。主な仕事の内容として、スーパーマーケットのレジ打ち、工場での製造作業、清掃業などの軽作業があげられる。また聴覚障害、視覚障害などのある生徒の中には大学進学を希望する者もあり、大学では学習のサポート体制がとられている。

異文化圏で行われる授業を参観することは、自分たちの授業の在り方を考えることにつながる。更には、教員としての在り方をも考える契機となる。3校という限られた数ではあるものの、オーストラリアの学校の状況から、改めて日本の教育を考えることができる。

(9) オーストラリアでは「生徒を型にはめない」という印象をもった。教科単位での飛び級システムや多様な選択教科が用意されたカリキュラムがその一例である。ワガワガ・ハイ・スクールでは、各教科の科目に加え、酪農に関する科目が用意されていたり、隣接する職業専門学校（TAFE）での科目履修も可能となっていたりしていた。生徒一人一人の興味関心や将来の展望にあった学習が可能な環境が整えられていると感じた。選択の仕方によっては、一つのことをより専門的に学ぶことが可能となる。また、編入や進路変更に対しての規制が緩やかであるため、その時点での意思を反映させた選択が可能となる。この根底には、オーストラリアでは、日本の学習指導要領のようなものが存在はするが、実際には機能しておらず、何を教えるかは、州・地区・学校あるいは教科担当に任されているという実情がある。例えば、ワガワガ・ハイ・スクールがあるニュー・サウス・ウェールズ州では、シェークスピアを学ぶことが必修とされていた。学ぶ主体である生徒により近い立場にある者に、裁量権があることは、ある意味、有効なことだと考える。このような環

境下においては、意欲的に学ぶ生徒が育ちやすいと考えられるし、また、実際に多くの生徒たちが意欲的に学習に取り組んでいた。しかし、学習指導要領のような統一した基準がないが故に、教育の質的なばらつきという弊害が生じる可能性もあると思う。少なくとも、日本のように集団で学ぶことや学習集団の雰囲気重視する国においては、現行のスタイルが合っていると思う。ただし、個が集団に埋没してしまわないよう、各生徒が、自分の責任において意思決定をする場面や一人一人の考えを発表するような場面を意図的に設定していくといった配慮は欠かすことができないと感じた。

(10) ワガワガ・ハイ・スクールで参観した、副校長のブラウン先生の英語の授業が印象に残っている。生徒とのディスカッション形式で、シェークスピア作品における人間の所属感について考える授業であった。テーマ自体が抽象的であったので、英語の詳細を理解することはできなかったが、生徒が活発に意見を述べ合い、そして時には、先生も自分なりの解釈や説明などを述べてそれに加わるというスタイルで、とても生き生きとした印象を受けた。聞けば、ブラウン先生は、地区内のチャールズ・スタート大学（CSU）でも講義を担当するほどの力量の持ち主であるということだった。反面、講義調の単調な授業もあり、教師の力量に大きな差があるように感じた。それを埋めるためには、各自の研鑽が必要だが、オーストラリアでは、それが各教師個人任せになっている。日本でも教師間の力量差はあるが、それを埋めるための授業研究会や学校研究といったシステムが存在

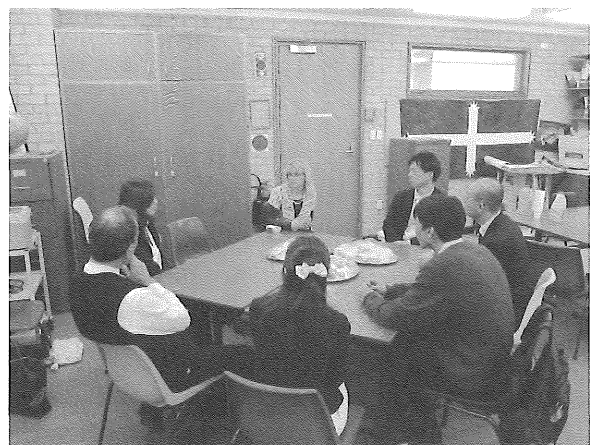


写真4：ワガワガの教員との意見交換（CSU）

している。それは、日本の伝統的な良さの一つであると改めて感じた。それらを十分に機能させ、教師個々の能力や教師集団の結束力を高め、学校力開発の一つの方策となり得ると感じた。

5 おわりに

本研究科がスタートして最初に実施した今回の異文化圏実習では、ブライアン教授を始めとするCSUのスタッフによる周到な準備にも支えられ、充実した授業参観と授業実践を行うことができた。来年度以降も、同様のプログラムによって実施していくのが妥当であると思われる。課題点としては、実習の終了後の学修の在り方についての再検討が挙げられる。異文化圏実習のねらいを達成するためには、実習への参加を通して感じたことや考えたことを報告し合い、多面的な検討を加えていくことが有効であると思われる。

謝 辞

異文化圏実習は、地域教育文化学部教授 上山真知子先生によって細部まで綿密に企画・設計されたものである。上山先生とチャールズ・スタート大学（CSU）教授 ブライアン先生との信頼関係がなければ、実施が困難なものであった。また、実施に当たっては、オーストラリア国立大学（ANU）教授・池田俊一先生、教育企画室教授 山口常夫先生の全面的な御協力を得ている。心からの感謝を申し上げたい。